中国・四国・九州地方における都市の観光イメージについて
－観光パンフレットを用いた場所イメージの定量的分析の試み－

内田　順文

地理・環境専攻助教授

1．はじめに

筆者は、さきに市町村が発行している観光パンフレット[1)]を資料として用い、そこに記載された内容が定量的データとして、地理学的な計量分析に耐えうるかどうかを、いくつかの分析事例を通して明らかにすることを試みた[2)]。いわゆる観光パンフレットは、他所から来る観光客に対してその市町村内の観光ポイントを手短に紹介したカタログとしての機能を持っており、当該市町村の観光地としてのイメージをコンパクトに表現したテキストであると見なすことができる。したがって、観光パンフレットに描かれた市町村のイメージは、多少誇張されている場合はあるにせよ、実際の場所イメージの公約数的な姿を細部にわたるまでかなりよく反映しているのではないかと考えたからである。

その結果、観光パンフレットを場所イメージの定量的分析用のデータとして利用することについて、多少の手応えが得られた。たしかに観光パンフレットに表現されたトピックは、日本地誌中での記事のような客観的な記述とは異なり、あくまで観光地としての都市のイメージを反映するものであるわけだが、それを十分考慮したうえで分析を行うことはある程度可能であると思われる。

本論は、こうした結果をふまえ、さきに事例として取り上げた中部地方10県に引きつづいて、中国地方5県・四国地方4県・九州地方8県を対象に、これらの地域の観光パンフレットをデータとし、主成分分析を用いることで、これらの地域における観光イメージの構造を明らかにしたい。

2．観光パンフレット情報のデータ化の方法と手順

今回の分析に使用するデータの基となるのは、筆者がこれまで収集してきた各市町村発行の観光パンフレットであるが、その規格・形態・内容はさまざまであり、市町村間で統一などされてはいない。そこで、これらに記載された情報を数値データ化するにあたって、次のような基準を設けることにした。

① 観光パンフレットは、市町村役所または観光協会発行の公のもののみを用い、私企業が作ったものは用いない。

② 観光パンフレットの形状には、冊子になったもの、折りたたまれた一枚もの、一枚もの、の3種類があるが、少しでも情報を多くデータに取り入れたいので、できるだけ冊子になったものを資料とし

て用い、これがない場合は折り畳まれたもの、それもない場合には一枚ものを用いる。原則として発行年度の新しいものを資料として用いるようにしたが、過去10年間に発行されたものが複数ある場合は、より記載内容の詳しいものを選定した。

③　観光パンフレットのサイズ、総ページ数などは、それぞれのパンフレットで異なるため、データはすべて面積比（%）とする。その際、表紙・目次・市街全体の地図など、観光地の紹介の本文とは認められない部分については計算から除外した。ただし、表紙や目次の部分がすでに観光地の内容紹介になっていると見なしうるものについては計算に含めた。同様に、旅館等宿泊施設の紹介や地元企業などの広告、当該市町村内ではない周辺観光地の紹介部分なども除外した。つまり、観光パンフレットの記事の中で、その市町村の観光地を紹介した本文のスペースを100としたときの、各トピック（記事）ごとの占有率を計測した。その際、文章と写真は同等に扱い、純粋に紙面に占める面積を数値化した。

以上の方法で観光パンフレットに記載された各トピックごとの占有率を算出したのち、類似したトピック同士をまとめて、最終的に58個の分類項目[3]のいずれかに分類した（第1表）。これら58個の分類項目（変数）は、従来より観光経済学や風景論で行われている、観光資源あるいは風景の分類[4]をもとに、観光パンフレット内のトピックがある一定の類似性のあるイメージによって、できるだけ矛盾なく分類できるよう、さらに今後の分析への利便性を考慮して、分類項目同士が階層的な類似性の構造を持つように、筆者が設定したものである。

なお、今回の分析では中国地方5県・四国地方4県・九州地方8県を対象地域とするが、町村発行の観光パンフレットには情報量の少ないものも多いので、前回と同様に分析の対象から除外し、2000年7月1日時点での市制施行市発行のパンフレットのみを取り上げて分析の対象とした。また、該当する173市のうち、山口県新南陽市と福岡県春日市の2市については観光パンフレットを入手できなかったため、分析の対象から除外し、残る171市を分析の対象とした。

こうして今後の分析に用いる素データを作成した結果、58種の分類項目（トピック）の1都市あたり平均出現数は16.22（標準偏差は4.87）であり、最もトピックの種類が多かった都市は徳山の30種で、以下、松江・下関（29）、那覇（28）、福岡（26）とつづき、最少は尾道の4種であった。また、参考までに第1表中に171市の分類項目ごとの平均値と標準偏差の値を示したが、これを見ると、観光パンフレット中で最も多くのページが割かれている対象は、「祭・行事」であり、以下「社寺」・「海」・「山」・「町並」・「公園」の順でつづいていることがわかる。

3．主成分分析を用いた都市の観光イメージの分析

1）分析の手順

前章に示した要領で作成した58変数×171ケースのデータ行列は、観光パンフレットに

第1表　記載トピックの分類項目および171市の平均と標準偏差

分類項目	内　容	平　均	標準偏差
01 山	山岳、高原、丘（展望台）、岩石	3.61	6.34
02 森	森林、林、森林公園	0.58	2.07
03 牧場	牧場	0.16	1.02
04 平野	平野、平原、野原、盆地	0.13	0.83
05 湿原	湿原	0.00	0.00
06 湖沼	湖沼、池	0.78	2.25
07 水	水、地下水、湧水	0.52	2.18
08 川	河川、水路、運河	2.11	4.98
09 渓谷	渓谷、谷、渓流、渓流に架かる橋	0.93	2.48
10 滝	滝	0.60	1.63
11 海	海、海岸、島	6.22	9.11
12 植物	植物、花、単独の樹木	1.83	3.97
13 動物	動物、野鳥観察	0.75	2.47
14 温泉	温泉、温泉施設、温泉情緒	2.54	5.08
15 遺跡古墳	遺跡、古墳、考古、出土品	1.56	4.28
16 古代中世	古代・中世の史跡、古代・中世の人物	1.91	5.77
17 城	城郭、城跡	2.86	4.77
18 庭園	庭園	0.86	2.45
19 近世史	17.18.20.21以外の近世の史跡、近世の人物	2.36	3.91
20 町並	歴史的町並、歴史的建造物、近世の民家	3.54	7.40
21 街道	街道、宿場跡、一里塚など	0.26	1.18
22 洋風建築	近代の洋風建築、教会、異国趣味、外国人	1.13	4.16
23 近代史	22以外の近代の史跡、近代の人物	1.09	3.31
24 社寺	神社、寺院、仏像	8.63	9.53
25 文学	文学、文学者、文学碑、歌碑	1.92	5.05
26 美術音楽	美術品、美術館、音楽、演劇、芸術家	1.68	3.97
27 伝統芸能	能、歌舞伎、伝統芸能	0.91	2.25
28 伝統工芸	陶磁器、漆器、織物、無形文化財、陶芸家	2.94	6.13
29 民話伝説	民話、伝説、昔話	0.70	2.97
30 民俗風俗	民俗的事象、風俗	0.62	2.25
31 気象風土	気象現象、天体	0.21	1.25
32 料理	料理、食事	2.54	4.49
33 市場	伝統的市場、朝市など	0.48	1.36
34 祭・行事	祭り、イベント	13.07	8.52
35 市街地	市街景観、都市的建物群、ビルなど	0.54	1.72
36 商店街	繁華街、商店街、地下街、ｼｮｯﾋﾟﾝｸﾞｾﾝﾀｰ	0.70	2.49
37 鉄道	鉄道、駅、市電	0.22	1.11
38 土木	高速道路、ダム、発電所、空港、橋梁など	1.16	3.42
39 港	港湾、マリーナ	0.60	2.32
40 街路	歩道、緑道、狭い通り、街中の遊歩道など	0.40	1.54
41 公園	都市公園、総合公園	3.39	4.89
42 ﾓﾆｭﾒﾝﾄ	近代に作られた塔・大仏・ﾓﾆｭﾒﾝﾄ、路上彫刻	0.29	1.07
43 博物資料	博物館、歴史資料館、民俗資料館、科学館	2.68	3.75
44 文化施設	会館、ホール、公民館、物産館、その他施設	2.35	3.88
45 動植物園	動物園、植物園、水族館	0.96	1.92
46 遊園地	遊園地、ﾃｰﾏﾊﾟｰｸ、ﾚｼﾞｬｰﾗﾝﾄﾞ	0.70	2.76
47 ｽﾎﾟｰﾂ施設	体育館、運動公園、ｽﾀｼﾞｱﾑ、ﾃﾆｽｺｰﾄなど	2.20	3.87
48 ゴルフ場	ゴルフ場	0.60	1.68
49 スキー場	スキー場	0.17	1.29
50 山ﾚｼﾞｬｰ	登山、ｷｬﾝﾌﾟ場、野外レクリ施設、ﾊﾝｸﾞﾗｲﾀﾞｰなど	1.84	3.28
51 川ﾚｼﾞｬｰ	川釣り、川下り、ボートなど	0.30	1.70
52 海ﾚｼﾞｬｰ	海釣り、海水浴場、ｳｨﾝﾄﾞｻｰﾌｨﾝなど	3.12	5.38
53 農林業	農林業、農産品、畜産品	1.79	3.06
54 水産業	漁業、水産品、水産加工品	1.52	3.53
55 体験観光	体験観光、観光農業、観光農園	0.40	1.54
56 地場産業	地場産業、伝統的工業、その製品	1.80	3.10
57 土産品	土産品、お菓子など	1.42	2.19
58 鉱工業	鉱業、近代工業、工業製品	0.85	2.67

第2表　記載トピックの分類項目および171市の平均と標準偏差

投入する変数の数	58変数	24変数	12変数	7変数
変数名	01 山	01 山	01 山・川	01 自然
	(50より)			
	02 森			
	03 牧場	02 平野		
	04 平野			
	05 湿原			
	06 湖沼	03 川・湖		
	07 水			
	08 川			
	(51より)			
	09 渓谷			
	10 滝			
	11 海	04 海	02 海	
	(52より)			
	12 植物	05 動植物	03 動植物	
	13 動物			
	14 温泉	06 温泉	04 温泉	02 温泉
	15 遺跡古墳	07 古代中世	05 史跡	03 歴史
	16 古代中世			
	17 城	08 近世		
	18 庭園			
	19 近世史			
	20 町並	09 町並		
	21 街道			
	22 洋風建築	10 近代		
	23 近代史			
	24 社寺	11 社寺	06 社寺	
	25 文学	12 芸術	07 伝統文化	04 伝統文化
	26 美術音楽			
	27 伝統芸能	13 伝統		
	28 伝統工芸			
	29 民話伝説	14 民俗		
	30 民俗風俗			
	31 気象風土			
	32 料理	15 食文化		
	33 市場			
	34 祭・行事	16 祭・行事	08 祭・行事	05 祭・行事
	35 市街地	17 市街	09 市街	06 都市
	36 商店街			
	37 鉄道			
	38 土木	18 土木		
	39 港			
	40 街路	19 公園	10 施設	
	41 公園			
	42 ﾓﾆｭﾒﾝﾄ			
	43 博物資料	20 文化施設		
	44 文化施設			
	45 動植物園			
	46 遊園地			
	47 ｽﾎﾟｰﾂ施設	21 ｽﾎﾟｰﾂ施設		
	48 ゴルフ場			
	49 スキー場			
	50 山ﾚｼﾞｬｰ	(01 山へ)		
	51 川ﾚｼﾞｬｰ	(03 川へ)		
	52 海ﾚｼﾞｬｰ	(04 海へ)		
	53 農林業	22 農林水産	11 農林水産	07 産業
	54 水産業			
	55 観光農業			
	56 地場産業	23 地場産業	12 工業	
	57 土産品			
	58 鉱工業	24 鉱工業		
抽出された主成分の数*	17	9	5	3
累積寄与率(%)	77.95	72.29	79.50	82.76

※ 平均項目分散以上の固有値を持つ主成分の数

表現された中国・四国・九州地方各都市の観光地としてのイメージの総体を表しているものと考えられる。そこで、このデータ行列に対して主成分分析を行うことによって、対象とする171都市の観光イメージを理解しやすい形にまとめ、これらイメージを構成している基本的な構造を知る手がかりとしてみたい。なお、このデータ行列は全てのデータ変数が百分率で表されているため、分析には分散共分散行列を用いることとし、算出した主成分に対してはバリマックス回転を施した[5]。

分析の結果、57の変数[6]から17の主成分が求められ、これらの累積寄与率は77.95%であった（第2表）。しかし、第3主成分までの累積寄与率で31.86%、第5主成分までの累積寄与率でも43.25%と低く、結果を容易に解釈できるほどには変数を要約するには至っていない。そこで、観光パンフレットの内容の分類項目のうち類似したイメージに基づくもの同士を統合して分類項目数を57から24に減らし、こうして作られた新たな24変数を用いて再び主成分分析を行った。その結果、24の変数から9個の主成分が得られ、これらの累積寄与率は74.60%となった（第2表）。以下、同様の方法で分類項目をさらに整理統合し、分析に投入する変数の数を減らしながら主成分分析を行うという操作を繰り返した結果、12変数の投入では5個の主成分で79.50%、7変数の投入では3個の主成分で82.76%という結果であった（第2表）。以上の結果から、今回は、より少ない成分で寄与率の高かった7変数での分析結果をもとに、解釈を進めていくこととする。

2）主成分分析の結果と解釈

第3表は、7変数の主成分分析によって得られた第1～第3主成分の成分行列（バリマックス回転後、値の再調整済み）であり、第1図～第3図は、各成分ごとに主成分得点の分布を地図上に示したものである。以下、成分行列をもとに各主成分の命名を行い、各主成分得点の地理的分布の特徴について解釈を試みる。

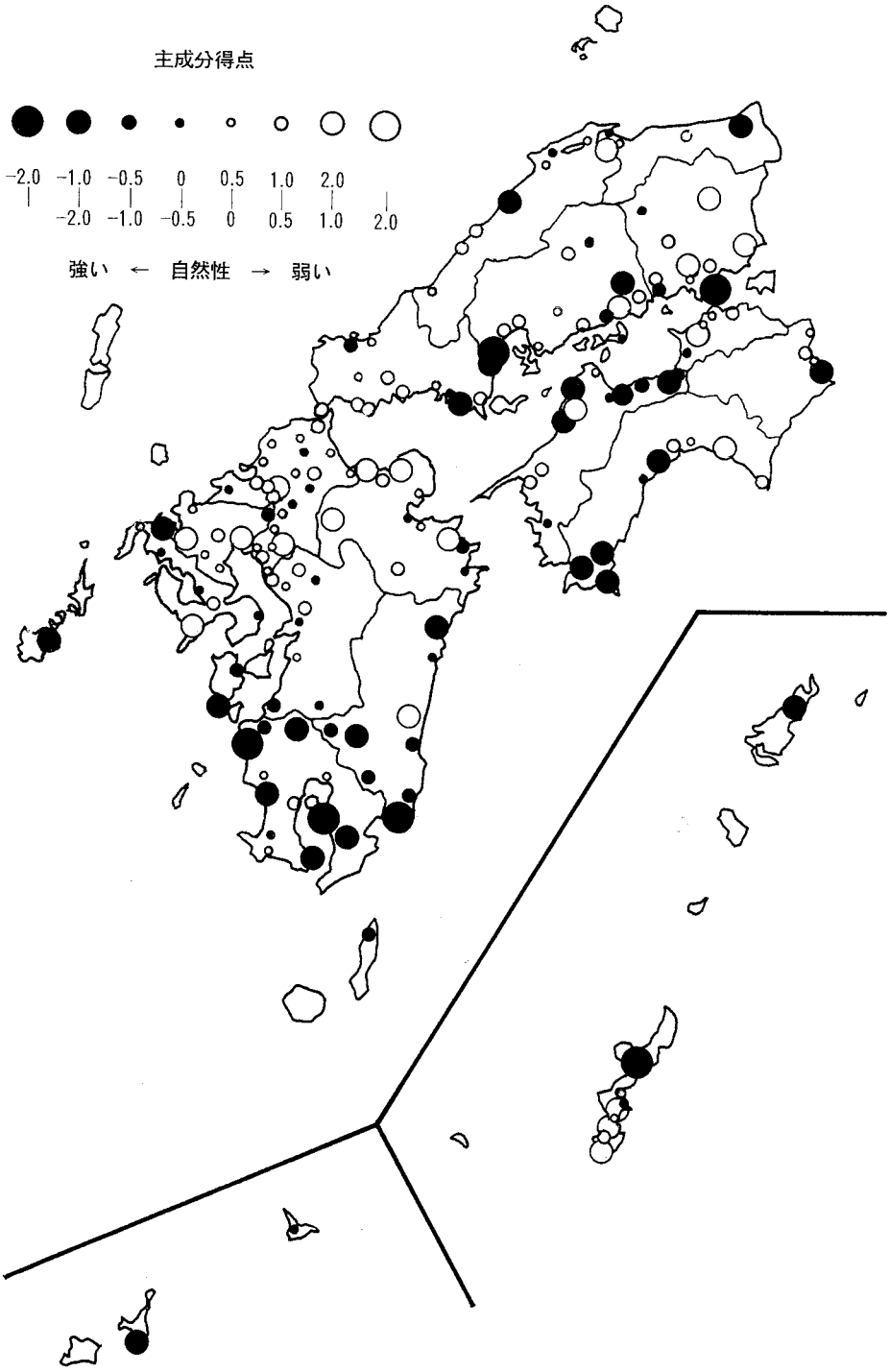
第1主成分は、「自然」に大きな負の負荷量を得る一方、「歴史」と「伝統文化」に正の負荷量を得ている。このことから、第1主成分はほぼ自然環境に関わる観光イメージの多寡を表す尺度と見なして、そのまま「自然性」と命名することができよう。

第1図から「自然性」の主成分得点（得点が負の値の大きな都市ほど自然的な観光イメージが強いということになる）の地理的分布を見ると、愛媛県・高知県・宮崎県・鹿児島県一帯を中心に「自然性」の強い都市が多く分布している一方、中国地方と香川県および九州北部には「自然性」の弱い都市が明らかに多い。「自然性」の強い愛媛－高知－宮崎－

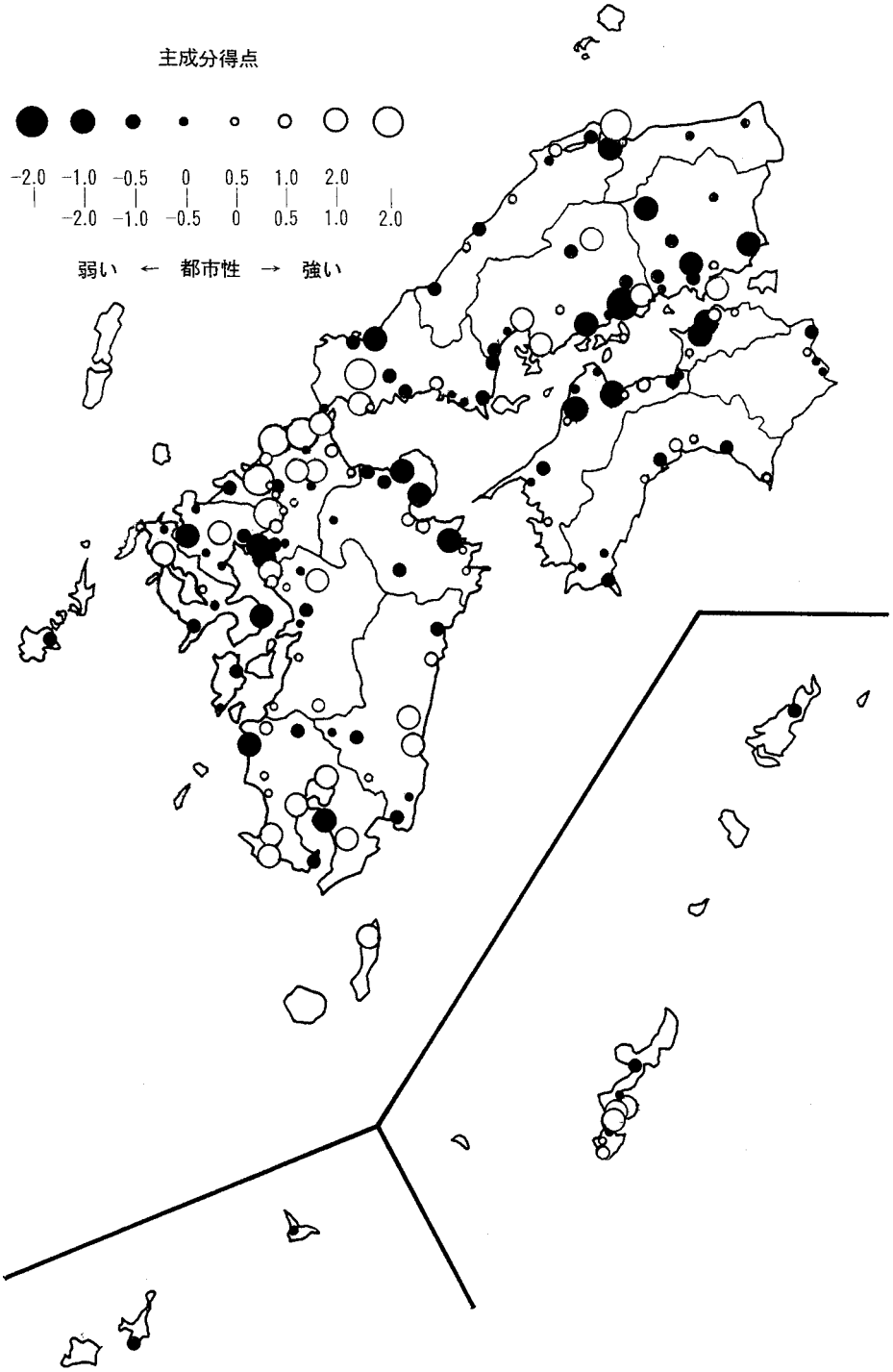
第3表　中国・四国・九州地方における主成分分析の結果

	成分行列（再調整後）※		
	1	2	3
自　然	－.975		
温　泉			
歴　史	.529	－.327	－.758
伝統文化	.534	－.477	.596
祭・行事		.208	
都　市		.952	
産　業			.361
寄与率	43.39	22.84	16.53
累積寄与率	43.39	66.23	82.76
命　名	自然性	都市性	歴史性

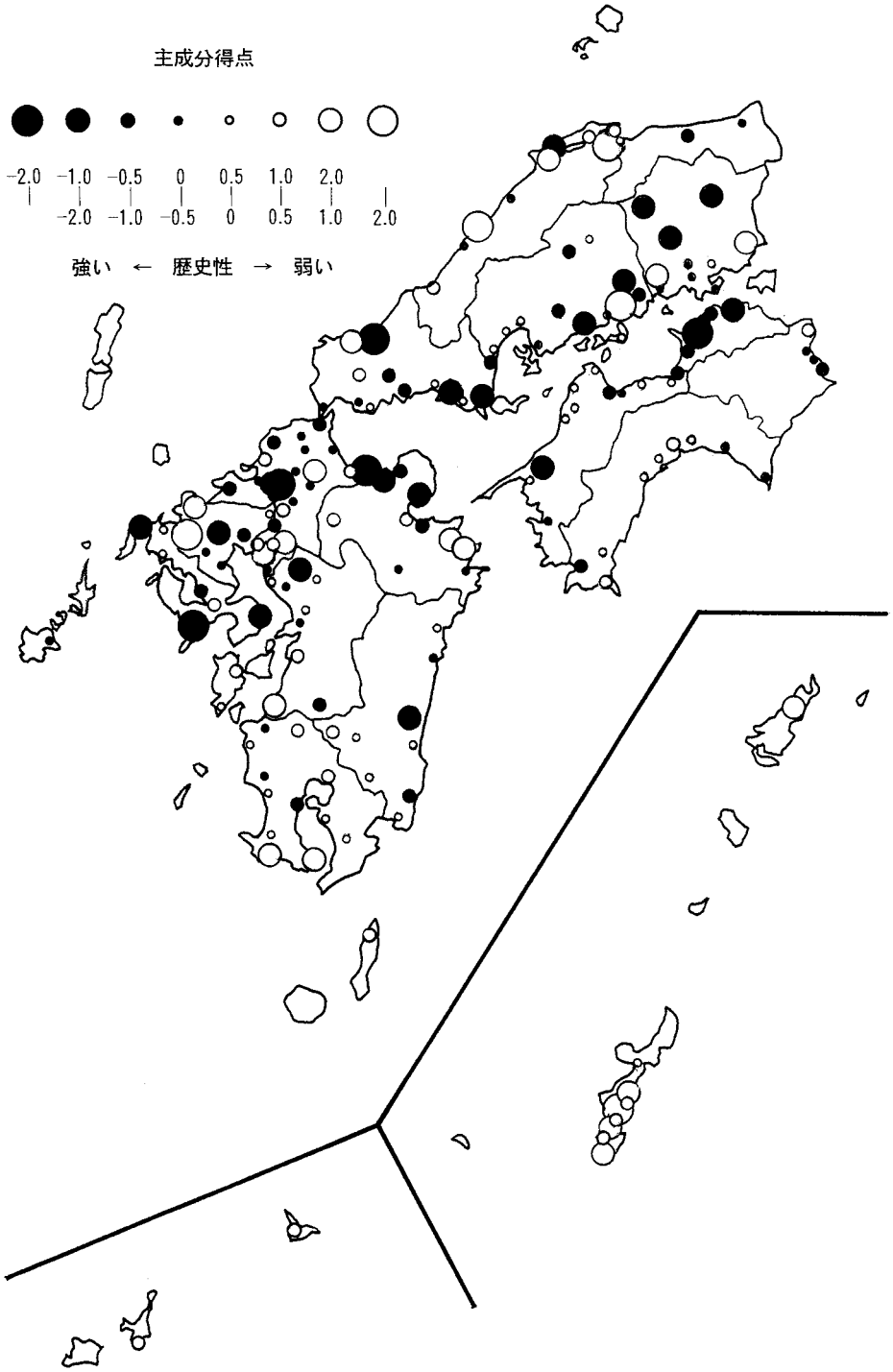
※ 成分行列のうち、絶対値が0.2以下のセルは空欄とした



第１図　第１主成分得点の地理的分布



第 2 図　第 2 主成分得点の地理的分布



第3図　第3主成分得点の地理的分布

鹿児島のラインは地体構造上西南日本外帯に位置する山岳地帯とほぼ一致しており、この地方の中では標高が高く険しい山や、その山地を縫って走る深い谷や川の存在が、これらの地域に立地する都市のイメージの「自然性」に影響を与えているのではないかと思われる。逆に中国地方・香川県・九州北部は、険しい山岳のない西南日本内帯に位置することから「自然性」は総じて弱く、岡山県玉野市・広島県大竹市・長崎県松浦市のようにこの地域で例外的に「自然性」の強い都市の大部分は海に面しており、海のイメージが「自然性」を強めていることが予想できる。この二つの条件のいずれをも満たしていない都市、つまり西南日本内帯の内陸部に立地する都市は、総じて「自然性」のイメージは弱くなる傾向がある。

第2主成分は、「都市」に大きな正の負荷量を持ち、「歴史」や「伝統文化」に負の負荷量を持つことから、都市的な観光資源の質を示していると思われる。つまり、都市の持つ現代的な部分と古い部分とを示す軸であり、その都市が現代的な都市としてのイメージをどの程度持つかを示す軸であると考えられるので、「都市性」と命名する。

第2図から「都市性」の主成分得点（得点が正の値の大きな都市ほど都市的イメージが強いということになる）の地理的分布を見ると、福岡県から鹿児島県へ至る九州の南北と沖縄本島に「都市性」の強い都市が多く分布しており、鳥取県境港市・広島県広島市・呉市・福山市・山口県美祢市・小野田市・長崎県佐世保市などといった例外を除くと、中国・四国地方全域と大分県および福岡県筑後地方～長崎県は全般的に「都市性」が弱い傾向が見られる。たとえば広島・美祢・北九州・飯塚・大牟田・佐世保のように、概して鉱業や工業のイメージが強い都市に「都市性」が高くなる傾向が読みとれるが、第2主成分は都市の古い部分を示す尺度でもあるので、歴史的なイメージや伝統的なイメージが薄い都市も相対的に「都市性」が強くなることにも注意する必要があろう。宮崎県・鹿児島県の諸都市や広島県庄原市・佐賀県多久市・熊本県菊池市などはそのような例ではないかと考えられる。

第3主成分は、「歴史」に大きな負の負荷量を持ち、「産業」に正の負荷量を持つことから、歴史的な観光資源の多寡を示していると思われるので、「歴史性」と命名する。ただし、第3主成分は「伝統文化」に対して正の負荷量を持っているので、ここでいう「歴史性」が精神的なものを含めて古いもの全般を指すわけではなく、史跡や社寺といった物質的な歴史遺物に基づく古いイメージを示す軸であることに留意する必要がある。

第3図から「歴史性」の成分得点（得点が負の値の大きな都市ほど歴史的イメージが強いということになる）の地理的分布を見ると、山陽地方と香川県および九州北部に「歴史性」の強い都市が多く分布しており、それ以外の地域では山口県萩市・愛媛県松山市・宮崎県西都市といった若干の例外を除いて「歴史性」の弱い都市が多い。その理由については今回の分析結果からだけでは明言できないが、「歴史性」の強い都市の分布域が、近畿から山陽道もしくは瀬戸内海を通って博多や長崎へ抜けるルートとほぼ重なっていることから、近畿～博多・長崎という古代から近世を通じての西日本の重要な交通路との隣接性が「歴

史性」に関係している可能性が考えられる。

3）中部地方における主成分分析の結果との比較

さきに中部地方10県について行った7変数による主成分分析の結果では、今回の中国・四国・九州地方17県の場合と同じく3個の主成分が得られ、第1主成分は「自然性」、第2主成分は「歴史性」、第3主成分は「都市性」と命名された（第4表）。したがって、主成分の順序は多少異なるが、全体としてのイメージの基本的な次元構造が「自然性」「歴史性」「都市性」の三つの軸によって構成されている点では、よく似通っており、基本的には共通する観光イメージの構造に従っているものと予想される。しかしより詳細に見ると、中部地方の結果と今回の結果とで異なっている点もいくつか指摘できる。

中部地方で行った分析結果の第1主成分である「自然性」は富山県から長野県・静岡県に至るいわゆるフォッサマグナ沿いの都市に強く、険しい山岳地帯との関連性が指摘できたが、今回も西南日本外帯に位置する都市に「自然性」が強いという傾向が見られた。また、前回険しい山岳地帯以外の条件として海岸線の存在があげられたが、今回も同様の傾向が見られた。前回の場合も今回も、第1主成分として得られた尺度は「自然性」であり、その分布傾向もほぼ同じ理由で解釈できたわけである。

中部地方の場合は第3主成分であった「都市性」も、今回の第2主成分とほぼ同じ尺度であると考えられる。しかし「都市性」の強い都市の分布傾向は、中部地方の場合と今回とではいくぶん違いが見られた。中部地方の場合は、臨海部に「都市性」の強い都市が多く、内陸部には「都市性」の弱い都市が多いという明瞭な傾向が見られたが、今回の場合は必ずしもそうとは言いきれない。その原因の一つとして考えられるのは、次に述べるように中部地方の場合は第2主成分「歴史性」として明確に現れていた都市の歴史的イメージに関わる部分が、今回の分析では第3主成分だけではなく、第1主成分「自然性」や第2主成分「都市性」の反対の尺度としても現れており、「歴史性」の軸が「自然性」や「都市性」の軸と並んで明確に示されていた中部地方の場合と比べると、少々わかりにくい構造になっている。その正確な原因は現時点ではわからないが、さきの対象地域であった中部地方が全体として「ひとかたまり」であり、日本海側・内陸部・太平洋側という三層構造で理解できる、わりと単純な構造をした地方であったのに対し、今回対象とした中国・四国・九州はその境界に内海を含み、それぞれ独立性の高い三つの地方である点に求められるのかもしれない。

いま述べたように、中部地方の場合は第2

第4表　中部地方における主成分分析の結果

	成分行列（再調整後）*		
	1	2	3
自　然	－.717	.593	.352
温　泉			
歴　史		－.932	.303
伝統文化	.524		.250
祭・行事	.528		
都　市			－.984
産　業	.604	.269	
寄与率	34.75	29.96	17.13
累積寄与率	34.75	64.72	81.85
命　名	自然性	歴史性	都市性

* 成分行列のうち、絶対値が0.2以下のセルは空欄とした

主成分であった「歴史性」が総合的な歴史的・伝統的イメージの総体として理解できたのに対し、今回の第3主成分は第1主成分と第2主成分で説明しきれなかった歴史的イメージとしての「歴史性」という点で、多少理解しにくいものとなっている。それでも「歴史性」の強い都市の分布特性は、中部地方の場合、主として東海と北陸の西側に集中していることから近畿地方との近接性が予想できたが、今回もやはり近畿地方との関係が指摘できそうな結果となった。ただし、中部地方の事例のような明らかな同心円構造を示すわけではなく、近畿から山陽・瀬戸内を通じて九州北部を結ぶ古代以来の歴史的ルート沿いに「歴史性」の高い都市の集中が見られたことは興味深い。

4．県単位で見た観光イメージの特性

1）7変数の主成分分析による分析

つぎに、各都市ごとのデータを所在する県ごとにグループ化して集計し、再び百分比を計算したデータを、各県の観光イメージを表したものと考え、このデータ行列にさきほどの分析と同じ「自然」「温泉」「歴史」「伝統文化」「祭・行事」「都市」「産業」の7変数での主成分分析を行い、その結果から県単位で見た各県の観光イメージを見てみる。第5表は、その結果得られた第1～第3主成分の成分行列（バリマックス回転後、値の再調整済み）である。

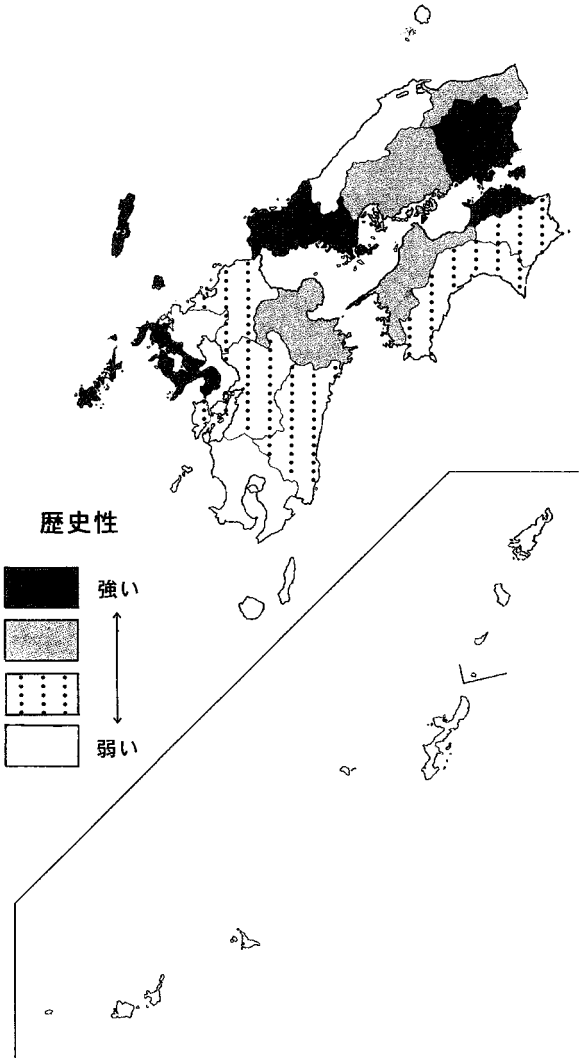
この結果を見ると、第1主成分は歴史的な観光イメージを示していることから、明らかに「歴史性」の尺度であると考えられ、同様に第2主成分は「自然性」の、第3主成分は「都市性」の尺度をそれぞれ表していると考えられる。前回の中部地方諸都市の事例や前章で行った中国・四国・九州の諸都市の事例と同じの三つの主成分が抽出されたわけであるが、この分析では第1主成分の「歴史性」が63.5％という高い寄与率を示しており、中国・四国・九州地方に位置する各県の観光イメージが、まず第一に「歴史性」によって決定づけられていることが示された。ここでいう「歴史性」とは、「産業」や「祭・行事」と相反の関係にあり「伝統文化」とも相関がないことから、歴史的な過去そのものや過去の遺物に基づくものであって、「古いもの」や「懐かしいもの」全般を指すものではない。

第5表　県単位における主成分分析の結果

	成分行列（再調整後）*		
	1	2	3
自　然		.968	
温　泉			.490
歴　史	－.895	－.391	
伝統文化		－.666	－.618
祭・行事	.691		
都　市	.303		.872
産　業	.693		
寄与率	63.50	19.71	8.45
累積寄与率	63.50	83.21	91.67
命　名	歴史性	自然性	都市性

* 成分行列のうち、絶対値が0.2以下のセルは空欄とした

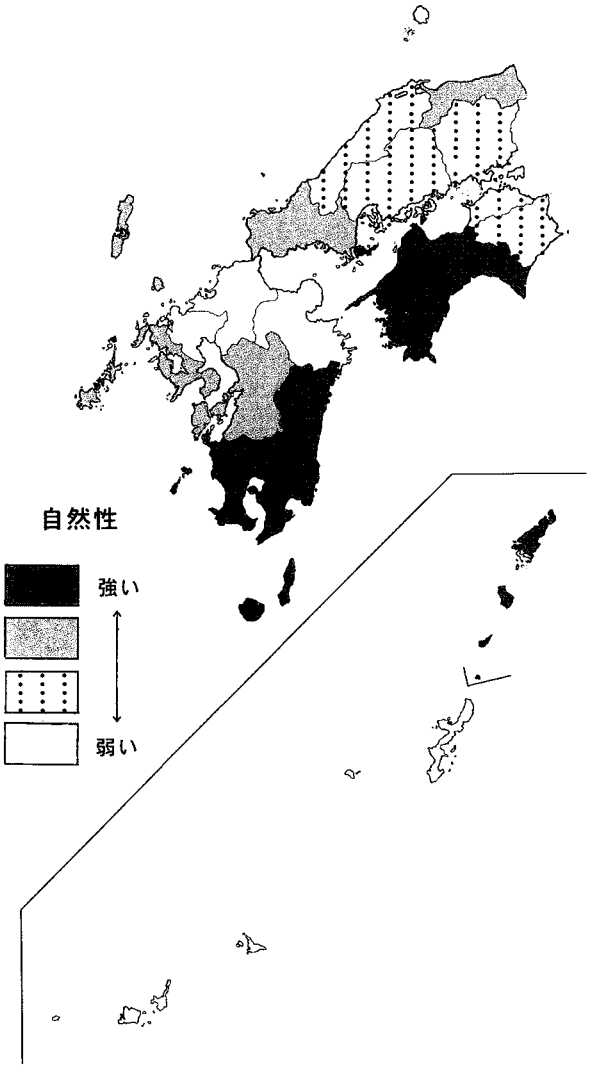
その第1主成分「歴史性」の主成分得点を、県別に低い（「歴史性」が強い）方から高い（同弱い）方へ4つのカテゴリーに区分して地図上に示したものが、第4図である。「歴史性」の強い県は岡山県・山口県・香川県・長崎県であり、長崎県を例外として瀬戸内海沿岸に強い県が集中していることが読み取れる。瀬戸内海沿岸の地方は歴史的に長い間日



第４図　県単位で見た第１主成分得点の地理的分布

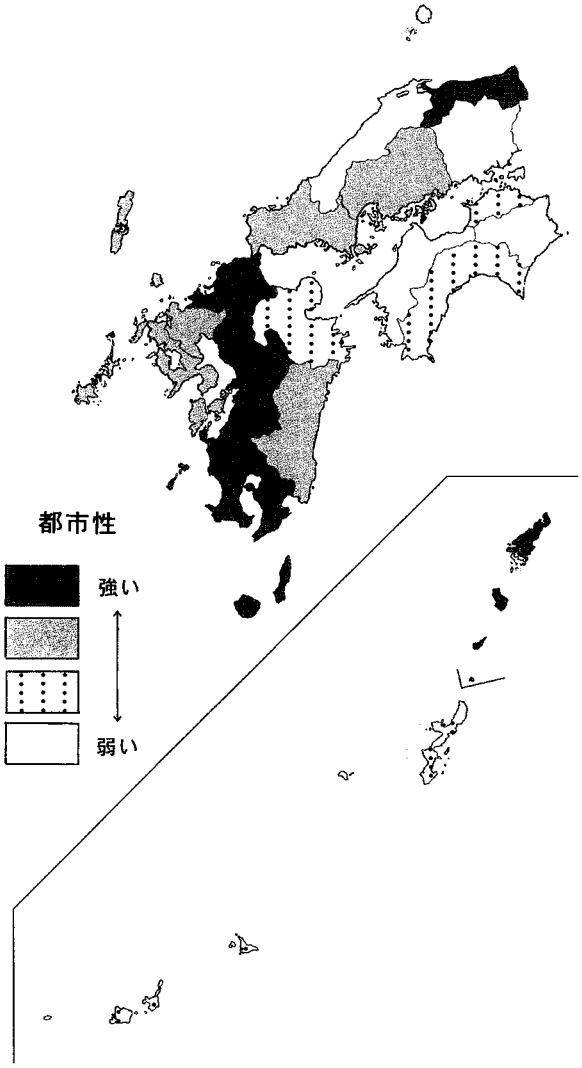
本の中心であった近畿地方との近接性から多くの歴史的な遺産ないしそのイメージを保持しているのではないかと推測され、また長崎県については古代〜近世における海外との接触の歴史の深さが影響しているのではないかと考えられる。一般に歴史的なイメージが強いと思われがちな島根県や沖縄県は存外「歴史性」が弱いこともわかるが、それはおそらく沖縄や島根の歴史的なイメージは、過去の歴史そのものではなく、たぶんに民俗的・民衆的なものによって作られていることを示すものだろう。

つぎに、第２主成分「自然性」の主成分得点を地図上に示したものが、第５図である。この「自然性」はいわゆる自然的なイメージを表すと同時に、民俗的・伝統的なイメージ



第５図　県単位で見た第２主成分得点の地理的分布

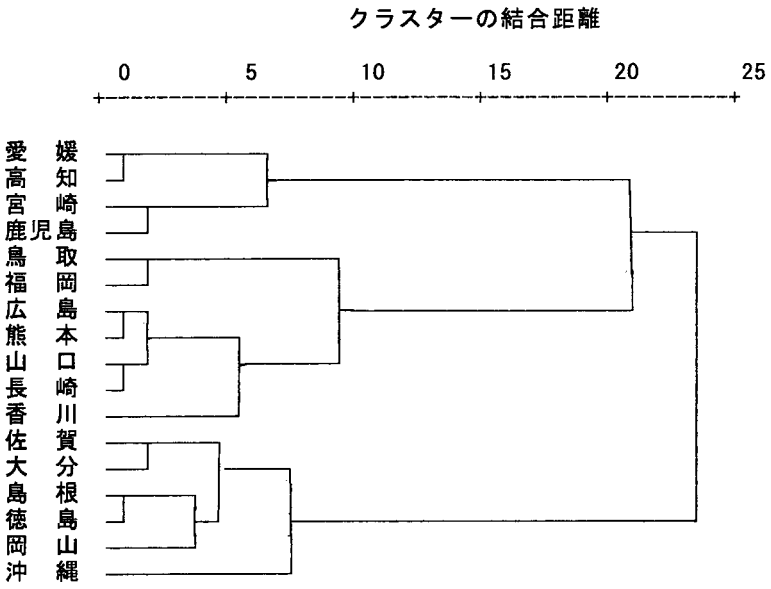
と逆のもの（たとえば「野生」のような概念）をも表す。いわば「自然－人文」に近い尺度を表していると考えられる。「自然性」の強い県は愛媛県・高知県・宮崎県・鹿児島県とその周辺に集中しており、これは前章で述べたのと同様、明らかに地体構造上西南日本外帯に位置する山岳地帯とほぼ一致する。逆に、険しい山岳地帯を持たない中国地方と九州北部の「自然性」は一様に弱い。また、一般には自然のイメージが強いと思われる沖縄県が、福岡県・佐賀県に次ぐ低いレベルの「自然性」しか持たないことも興味深い点である。険しい山岳地帯の存在が、平地や海の存在と比較して、山のほかに川や谷や湖といった自然景観あるいはこうした自然環境でのレジャーと結びつくことに起因するのと同時に、こうし



第6図　県単位で見た第3主成分得点の地理的分布

た厳しい自然が人文的なイメージを阻んできたという一面もあるかもしれない。

さいごに、第3主成分「都市性」の主成分得点を地図上に示したものが、第6図である。鳥取県を例外として除くと、「都市性」の強い県は九州に集中しており、四国は総じて「都市性」が弱い。沖縄県も弱くなっている。ここでいう「都市性」とは人工的で、かつ現代的なものの総合的なイメージであり、いわゆる「都市－農村」の都市とは異なる。むしろ伝統的なもののイメージが薄いという点で、新興工業都市と同様に、とくにこれといった観光資源のないふつうの農村も「都市性」が強くなる可能性がある。「温泉」と相関があることも、近年の温泉施設建設ブームと関係があるのかもしれない。



第７図　主成分得点をもとに Ward 法クラスター分析を行った結果

２）クラスター分析による県の分類

つぎに、以上の主成分分析の結果得られた第１～第３主成分得点をもとにWard 法でクラスター分析を行い、各都市を観光イメージの類似性によって分類してみた。その結果を樹状図として示したものが第７図である。これを見ると、愛媛・高知・宮崎・鹿児島という「歴史性」が弱く「自然性」が強い県のグループ、鳥取・福岡・広島・熊本・山口・長崎・香川という「都市性」が強く「自然性」が弱い県のグループ、佐賀・大分・島根・徳島・岡山・沖縄という「自然性」と「都市性」が弱い県のグループ、の三つのグループに大きく分けられている。また、それぞれのグループごとに属する県の地理的分布を見ると、はじめのグループは太平洋に面した南四国・南九州に、二つめのグループは中国・北九州に集中しているのに対し、三つめのグループは分散している。

少なくとも県単位で見るかぎり、各県の観光イメージは中国地方・四国地方・九州地方という地方単位で単純に割り切れるものではなく、むしろ中央構造線を境界とする地体構造と関連する自然的条件や、近畿地方との隣接性といった歴史的条件などによって決定される部分が大きいことが、この結果からも示唆されよう。

５．むすび

今回、中国・四国・九州地方の諸都市を対象として、観光パンフレットに記載された情報をもとに主成分分析を行い、その主成分の性質と分布の特性を解釈した。その結果、観光パンフレットに表現されている各都市の観光イメージの構成要素に関して、「自然性」「都市性」「歴史性」という三つの次元（尺度）を発見し、その構造の一端を解釈することが

できた。これは、完全に一致したわけではないが、さきに行った中部地方の諸都市についての分析結果とある程度の整合性を保つ結果となっている。これらの結果から、中部地方および中国・四国・九州地方以外の地方を含めた日本全体についての観光イメージの構成要素およびその構造に関しても、この三つのイメージの次元で説明できるのではないかという可能性が出てきた。次回の課題として、今度は日本全域に対象地域を広げて、上記の仮説を検証・確認してみたい。

注

1）ここでは、市町村が発行している観光用のパンフレット、ガイドマップ、市政要覧など観光客向けの資料を総称して観光パンフレットと呼ぶことにする。

2）内田順文「中部地方における都市のイメージについて－観光パンフレットを用いた場所イメージの定量的分析の試み－」国士舘大学文学部人文学会紀要第 31 号,1998,69-82.

3）前回より分類項目が 1 つ増えているのは、今回の対象地域である中国・四国・九州地方にはゴルフ場のトピックが相当数あったため、これを「スポーツ施設」から分離し、新たな分類項目として追加したからである。

4）小池洋一・足羽洋保『観光学概論』ミネルヴァ書房、高橋　進『風景美の創造と保護－風景学序説－』大明堂、など。

5）以下の分析にあたって、データの集計・解析には、SPSS for Windows Release 11.0.1 J を使用した。

6）今回の対象地域には分類項目 05 の「湿原」が出現していないため、この変数を除いた 57 変数で主成分分析を行った。